

村落研究の方法について 園田 恭一

研究会の席で御報告いただいたものを事務局でテープから再生、要約しました。報告者の表現と若干ことなり、主旨をそこなっている点も少くないかと思いますが、御許しいただきたいと思えます。したがって引用などされる場合はその点御注意下さい。

1. 村落研究の問題点

勤務先が村落研究から離れていることなどから、大会など二、三回欠席しているが、そうした多少村研から離れていた立場から、年報などをよんだ感想を含めて一、二話をしたい。私が村研の年報や社会学評論の村落関係の論文などを読んで感じる点の一つは、村落

研究者が、社会学の中で特殊な概念を使っているということである。他の分野の研究者がつかう概念とは違ったものを使っており、また、一般の社会学のキータームス——もったもそういうものがあるかどうかということも問題であろうが——や理論的枠組が村落の分析につかわれることが少ない。村落研究の中でつまかさねられた理論が他の社会学の部門と交流することが少い。

もう一つ、つかわれている概念・理論的枠組が人によって非常にちがうということが感じられる。それは村研の場合、社会学・経済学・歴史学・人類学などいろいろな専門の人が含まれるのでそうなるということもあるが、それにしても人によって非常にちがう。それも相互にその違いが十分規定され、意識されているのならば別であるが、そうでもない。そこで非常に膨大な、一つ一つはすぐれた研究がなされても、それらの比較・位置づけ・つまかさねがきわめてむづかしくなるのではないかと思う。そこで方法論を討議するだけでなく、分析の理論的枠組なり、基礎的概念なりを明確にするために、それを十分前に出して討議する機会をぜひ作ってほしい。年報第五集にのせられた昨年度大会の共同討議の中にもいろいろな概念——たとえば農業生産力の構造、農民層の歴史的段階の規定、土地所有の性格、農民層の分化分解、ムラ、村落共同体、自給的性格、部落、村落、社会関係、社会組織、家連合、自然村、農民層の主体的構造など——が使われている。これらはそれぞれ難かしい概念であるが、村落研究にとっては基礎的・中核的な概念・理論であるから、研究会の活動によってこれらが十分に煮つまるならば大き

な成果であるが、依然として多様な意味でつかわれていることが多いのではないか。村研は実証研究に志向されていることが一つの大きな特徴だと思いが、ある場合にはもう少しそれを把握する枠組や方法が十分議論される機会があってもよいと思う。

もう一つの印象は、さまざまな概念がどうも少しバラバラに使われているのではないかということである。それには、これらの理論化・把握が農民の立場、村民の立場からの理論化なり論理化なりになっているかどうかということも関連すると思う。何となく読んでいて、村社会のいきいきした実感がうきあがってこないのであり、何故そうなのかということがもう一つの問題となるわけである。そういう点を回復するためにはどういう方法論なり、手段なり、接近方法なり、概念化が必要なのかということが考えられてもよいと思う。私は、昨年地域関係のことについてまとめる機会をもったのであるが、書きおわって一番不満だったのは、それが日本の地域社会の実態、地域に生活している人たちのいろいろの問題をいきいきととらえていないということである。どういう方法をとればいきいきととらえることが可能かということ、むしろ書きおえてから考えて、今感じているのは、人びとの生活というものをもう少し中心において把握が必要ではないかということである。

2. 生活の概念と把握の枠組

社会を構成している人がどういふ暮らしをしているか、そのあり方やその変化という点からの理論化はできないだろうか。人びとはいつ、どういふ場面で、どのような条件の下で、どのような人びとと

生活をいとなんでいるかということから出発し、そういうあり方の変化、それをめぐっての人びとの結びつき、力関係の推移までひろげて地域生活、地域社会を理解するということは考えられないだろうか。もっとも、最近、社会学や経済学で生活構造論ということがいわれているが、私も当初はこういふ枠組には反感を感じていた。それはただ生活といえればよいところを何故生活構造といふのかといったことからあったが、しかしただ生活といふと、その研究が実体的・記述的なものにかたよりやすいということがあって、そういう生活を理論的・体系的に把握するところのみ一つとして、仮の名として、生活構造を考えるとすれば一つの意味があると思う。従来生活構造論は経済学では、社会政策・労働経済学・家庭経済学などで、また社会学では都市社会学・家族社会学などでとりあげられ、最近村研のメンバーの中にも使う人が少くないが、それらについていえることはどちらかというで見事な整理にすぎないということである。時間・空間とか、金銭、手段、役割、規範などをあげ、生活をどういふことに着目してとらえるかという形で見事に整理しているが、こういふ形では生活の中で一番それを規定している基本要因は何か、生活の中の矛盾はどういふ場面でどういふ形で出てくるのか、逆にあまりはっきりしなくなってしまうという印象をうけるし、またそういう批判もある。ここは生活構造論それ自体をとりあげる場でもないで、従来の生活構造論を一つ一つ検討することはしないが、村落生活なり、生活を基本においてとらえる場合にも、生活とはどういふことかということを明確にしておくことは必要である。それ

を欠くと現象ないし対象にひばられた議論になってしまう。

松原治郎によると、生活には三つのレベルがある。第一は、生存、生命といった動物的次元。人間も動物の一つとしてともかく生きねばならぬ。第二は、暮しという、より人間的にあるいは計画的に生きるという側面。第三は、日本語の生活という言葉にはあまりそういうニュアンスはないが、英語の Living には生涯という意味がある。そこではより将来にむかって生きるという意味が含まれる。生活というのはこのように広い概念である。

生活をとらえるには、大きくわけて生産と消費とに分解してとらえられると思う。何故そうわかるかということには問題もあるが、人間が生存するためにはものの消費が不可欠である。それには具体的には衣食住のほか社会的サービスの消費も含めて考えられる。ただ、ものは自然にそのまま存在しているものではないから、このこと的前提としてものが生産されるということが必要とされる。生活は当然この生産と消費の二つを含んで考えられねばならない。その場合、ものの生産というときには、自分でたべたり、使ったりするものを直接自分で生産するいわゆる自給自足経済ないし社会と、生産力の上昇にともない社会的分業の結果、自分の生産したものを売って、それによって貨幣をえて必要なものを買入れる、いわゆる商品経済とがある。これらは生きていくために必要なものを獲得する二つの方法である。人びとの暮らし、生活様式、生活内容、消費水準などについて考えるとき、今日の貨幣経済の下ではどういふ暮らしができるか、どういふ内容・様式のくらしができるかは、所得の水準で

基本的には規定されるといえる。それと同時に一定の所得が配分される基礎にはそれなりの源泉があるのであり、労賃・利潤・地代など——あるいは勤労所得・事業所得・資産所得などといわれることもある——がそれに相当する。そしてさらに所得の源泉を規定するのは、生産手段の所有・非所有の関係であるというよりな形で、暮らしてできる源へおいかけていくと、こうした形で生産という過程にどういふ立場で入りこんでいるかということにもつながっていくのである。

3. 生活の観点からの村落研究

村落研究においてもこういふ観点でなされた研究は少なくない。有賀先生の戦前から戦後にかけての研究はこういふ観点からの大きな仕事であったと思うが、この場合生活を非常に包括的にとらえ、分析的にというよりも総体としてとらえるということがつよかったように感じられる。有賀先生の仕事をうけつぐには、そこで把握されている生活をいかに論理的・体系的にうけつぐか、あるいはとらえなおすかが問題となる。

それからもう一つ、こういふ観点からの研究で、従来の村研年報の中で今でも非常に教えられることが多かったと思うのは、亡くなった中島竜太郎の「農家人口の配置規制」(『農村過剰人口の存在形態』時潮社版年報第三集)という論文である。これは彼の村落あるいは農村をとらえる枠組が前面に出されたものであり、ここでは、農業経営の維持、農家生活の存続という基本的要請が、家なり村なりのあり方を規制しているという観点からまとめられている。すな

わち、一定の暮らしを維持するにはどれだけの土地が必要か、どれだけの労働力を必要とするのか、一定の土地が配分されるとそれからどういふ暮らしができてくるのか、それを中心において家族なり村落なりのメンバーがどれだけ村に残留するか、あるいはどれだけ村から去っていくか、外からどういふ形が入ってくるかが、農業の再生産と農家生活の再生産を中心に考えられているのである。この論文では直接的にはふれていないが、そういう観点から家と家の結びつき、個人同志のむすびつき、村落社会内部の力関係、その推移がとらえられることが必要になってこよう。

4. 最近の生活変化の意味

生活を右のようにとらえた上で、最近の村落社会の変化をみると、それが非常に大きな変化であるといわれているが、私は生活という観点から考えたときそこの変化の最大のもの、家族経営・自営業者の分解、賃労働者化ということだと思ふ。小さいといえども自前で生産手段、生産対象をもち、自分の労働力で暮らしをなっていた人たちが、それらを動員しただけでは暮らしが成り立たなくなるという形で、くらしをなりたいたせるために外に働らきにゆく、やとわれてくらしをたてるようになる。これが自営業者の分解とか賃労働者化とかといわれることであるが、それが社会学の方でいう生産と消費の場の分離の基礎といえる。何故そうした分離が行なわれたかといえ、かつては生産と消費という機能を併せていとなんでいた家族、それをつむ村落から生産的機能が失なわれたからである。そして何故失なわれたかといえ、独立して生産をいとなむ

ことが十分できなくなるといふことであり、これが生産と消費の場の分離につながるわけである。それは当然に生活の場をひろげることになる。ソロキンが都市と農村を対比して、都市の方が経済圏・社会圏がひろいといふことをいふのは、そのことから生じる。人間関係とか、住民の所属集団のちがいがそういうことが基礎にあるという風に考えられる。

今問題にしたように消費にはいゆる衣食住が必要であるが、そういう個人的な消費手段のみでなく、今日非常に問題にされてきているのは、社会的消費手段、共通の消費手段である。これには、道路・上下水道・ガス・公園緑地・学校・病院・ゴミ処理・保育所などいろいろなものがあるが、それが重視されてくるのは、一つには商品経済の展開にとまないコミュニケーションが拡大する。それには物的コミュニケーションも精神的コミュニケーションもあるが、それが拡大すると、それを媒介する手段として道路などが必要になってくるというところによる。また、消費手段の中には一軒一軒ではもつことができないものがあり、生活が高度化・都市化するにしたがつて、その必要性がひろがってくるということもある。最近、過疎問題というよりな形で、人口の流出がつづく共通の消費手段、社会的消費手段を維持することができなくなるとして、農村でもこのことが問題とされてきている。

5. むすび

村研のようにいくつかの学問分野の共同研究が行なわれるときには、単にいろいろな立場から接近するということだけでなく、共

通の議論ができるような場がほしいわけであるが、今までは、「村落」という対象で共通のものを考えてきたといえよう。しかし、対象の共通ということだけではなくて、それをとらえる視角にももう少し共通のものがあってもよいという気がする。そういうものとして、なおそれ自体大いに議論の余地はあるが「生活」を中心に、もう一度家族、ムラをとらえなおすということを今度の機会にでもやってももらえればというのが私の希望である。

以上の報告のち、約一時間半にわたって来会の方々による討論が行なわれました。スペースの関係でその全体を御紹介することができませんので、それらの中から重要と思われる点だけをとりだし、発言の大意だけをお伝えすることとします。おわかりにくい点が多いと思いますが、今回はこのようにさせていただきます。まず、論議は「生活」という概念によって村落研究をすすめることが適当か否かということ、何人かの方から疑問が出されました。

川本「生活という概念が人によって違うのではないか。共通に把握できるものとなりうるのかどうか。それと生活構造についての規定を生産と消費というところからとらえているがそれではとらえきれないのではないか。経営学などでも家計と経営とにわけて分析しようとするが、農家経営を近代的経営としては分析しきれない。生産と消費というようにわけきれないのではないか。」

小池「川本氏のいうわりきれないところというのが一番問題なところなのではないか。経営学でわりきれられる部分もあるし、またわり

きってしまったおうとするものもあるが、そういう扱い方自体が正しいか否か問題だと思ふ。

また、われわれの場合と概念の使い方がちがうので、理解しえていない点があるかもしれないが、生活という概念をつかうことによって村を理解することができるのであろうか。村は生活をいとなむ個体の *Verkehr* であり、生産というのは生活概念の中に含まれるものではなくてその *Verkehr* の中に含まれるのではないか。さらに生産と消費の分離が問題とされ、そのことが自営業の解体だといわれるが、日本の場合自営業として成立しているのかどうか、それからはみだすところがあり、共同体の解体と自営業の解体が混然として生じているのである。そういう点を今のうちにわりきってしまったてよいかどうか疑問に思ふ。」

塚本「経済学の人との共同研究の場で生活という概念を使うと、消費生活というより狭義の生活を連想することが多く、われわれとイメージを一致させることがむずかしい。生産を含めた生活ということをどう考えるかということ、もう一つ生活構造論では矛盾ということがいわれながら、生活体系をその調和的・統合的な場面を強調してみることに陥ってしまっている。それらの点を解決しないかぎり、生活という概念を共通の議論の場にのせることさえむずかしい。」

園田「たしかに生活という消費生活が考えられる傾向が強いが、これを提起したのは、生きて生活をしている人間をとらえられる社会学を回復するためであり、トータルな全体をいかにしてとらえる

かが問題なのである。どういふ方法でも分析して残されるものは出ると思うが、基本的なものがこぼれおちるのとそうでないのでは非常にちがう。従来の研究において基本的なものがどの程度つかめているのだろうか。」

(この後、生産と消費の分離の契機の問題が語られ、生活をいきいきととらえるために、人類学のように長期間生活をともにするといふ方法が必要という見方に対して、理論ななし方法論が重要だといふ反論が行なわれたのち)

柿崎「地域という概念と生活という概念をどう関連づけるのか。」
園田「社会科学で地域を考えれば社会生活の再生産が行なわれる地域的範疇ということになり、時代によって再生産の行なわれ方がちがう、それに応じて地域的範疇もことなる。」

柿崎「それには生産も消費もふくむのか。そうだとすると両者がずれることはないか。」

園田「ずれることはあるが、両方を含めたものである。」

小池「資本主義社会では誰が生産したかわからないものを日常つかっており、非常にひろいVerkehrをうしろにもっていることになるのだが、その場合でもそういう形で地域が考えられるのか。」

園田「現在の社会で生産圏・消費圏といっても、或程度程度の問題になり、その中で比較的密接にかかわっている範疇ということにすぎないのである。」

蓮見「そういう風に考えると小さいものから大きいものまで大きくさんの地域が積み重なって、その中のどれをとらえて研究すべきか

ということがわからなくなるのではないか。」

園田「そういうことから、一方では権力によってとらえられた地域とか、不均等発展ということからとらえられる地域とかが提起されるのだが、それも一つのとらえ方であり、それだけでとらえてよいとは思えない。」

蓮見「村をとらえることの意味は、そうなると非常に相対的なものになり、研究者が任意にとりだしたものであるのか。」

園田「或段階までは任意なものでなかったものが、或意味において任意なものになりつつあるということを、生活という側からとらえてゆこうとするわけである。農民のくらしのあり方の変化からとらえようとするのである。」

塚本「有賀先生は村の生活組織というとらえ方をしたが、園田氏がとらえようとするのは、個人の生活なのか、個々の農家の生活なのか、村落の生活なのか。」

園田「そのユニットも時代により場面によって違う。だからどれをとるかをあらかじめこちらからきめるのではなくて、実際に応じてどれをユニットとするかということ自体もきめられねばならない。」

小池「その個人、農家、村というのはどういう風に相互に関連するののか。」

塚本「従来の生活構造論ではそのあたりがあいまいだったと思う。園田のいうように、村民の立場からの理論化をはかりたい、そのために生活をということはわかるが、それならば考えておくべき問題がある。従来の生活構造論では、所有というよりな問題と行動や意

識をつなぐ媒介的なものとして、この概念をもち込んでくると説明がつけやすいということから用いられたということがあり、また最近生活構造という概念がつかわれてきているのには、村民にかぎらず個人の行動や意識に変革をせまる立場からの科学をつくるのには有効なアプローチなんではないかということに使われてきていることがある。この場合にはうっかりすると政策科学や管理科学のようなものになってしまいかたむきがあるのだが、それをそのままおしすすめてよいのかどうか。それともそういう偏りを是正するために一度生活の概念をくみだてなおそうとするのか、もしもわれわれが生活ということを探案しようとするのであれば、このことをはっきりさせることが重要な問題なのではないか。」

園田「年報第五集で布施鉄治氏がいつているのはそうした管理科学というゆき方とは逆に、主体的意志の反映としてとらえている。階級の論理といわれる生産諸関係に対して、それに規定されないでむしろそれをはねかえすものとしてとらえている。」

塚本「園田氏はそういう布施氏のとらえ方をどうみるのか。」

園田「生活構造の理論化にはそこがポイントになると思う。私というのは従来までの生活構造論ではなくて、村の人びとの立場なり論理なりをよりよく把握するために、もっとトータルなものとしてとらえようとしているのだ。」

吉沢「農民や漁民の運動を生活構造からどうとらえるのか。」

園田「従来の社会学の生活構造論では、生活をめぐる矛盾・問題がどういう形で存在し、どういう風に意識されているかといった点

が十分明らかにされず、整理に終わっていると思う。」

(これらの論議と併行しながら、園田氏が報告のはじめに指摘し、また討議の過程でもくりかえし強調された最近の村落研究が農民生活をイキイキととらえていないという点についてもつぎのような指摘がありました。)

吉沢「従来の村落研究の業績がそんなに形骸化しているとは思わない。ただ戦後の社会学が小さなタコツボの中に入りこんで、こまかな社会関係をいじくる傾向がつよいので、これまでの実証をふまへながら、資本主義社会における農村の矛盾や問題を明らかにするのだという究極の課題さえはっきりとさせれば、必ずしもイキイキとしていないとはいえないのではないか。」

小池「イキイキとしていないというのはどういうことなのだろうか。報告の中で従来の研究ではこういうところをつかんでいないということを示してもらったよかったです。私たちは村研で報告されたものをいざれもヴィヴィッドなものとしてうけとっている。」

以上のほか、園田氏が報告でふれた有賀先生の研究をどのようにうけとめるかという点について柿崎氏から、それには土地所有ないし、所有という概念を社会学的にはっきりさせることが必要でそれによって、中世から近世にかけての所有権が細分化されてくる過程での社会関係の展開を本末関係としてとらえた有賀氏の業績をうけつぐことができるのではないかといった点も指摘されました。このようにこの日の研究会では、園田氏の報告で指摘された村落研究の問題点とその克服のための生活概念の導入をめぐって論議がかわさ

れたわけです。

最後にこの研究会では、大会での「方法論」のとりあげ方について意見をうかがいました。

園田「今迄の村研大会では方法論や基礎概念を前に出して論じることがなかったのではないか。村の実態よりもそういう方に重点をおいた集りも一度ぐらいやってほしい。」

柿崎「すでに年報に出されたものの中から特徴的な考えなり方法論をもっておられるような人に出てもらって、フィールドをバックにして方法論を出しあうようにしてはどうか。方法論なしにフィールドだけやっているという人はいない筈だからできるのではないか。」

中野「村研で議論が展開していくのには、いろいろな専門の人がいて、自分の専門だけに片よったことがとりあげにくいからだ。事実を出せば、お互に関心をもって共通の議論ができるということだ。フィールドの報告を主にしてきたわけだ。しかし、柿崎氏のいうようなやり方をすれば、事実はずでに出してあるのだから、それについてはいま一度語ることをしないで方法論をしゃべってもらうことができる段階にきているのではないか。うまくいけば、その事実は自分たちの方法論で分析すればこうなるんだというように、同じ事実から別の理論が出されるといふことにもなりうるのではないか。」

吉沢「今日の報告をきいて感じるのだが、農村を生活構造論の見地から分析したらばこうなった。従来の研究で明らかにできなかったところも明らかになってきたというところが指摘されればもっとよくわかったと思ふ。そういう意味で、何らかの実証があればもっとよくわかったと思ふ。そういう意味で、何らかの実証があ

って論議が行なわれるのがよいと思ふ。」

小池「村研の議論で一つ気になるのは、その中にはいろいろな専門の人がいるわけではあるが、社会学・経済学・法学など皆社会学の一部門なのであり、もっと連繋が行なわれてよいのではないか。とかく何かいうと経済学の間だからそういうので、社会学はちがうという形で反応される。両者をわけてしまふのでなくて、その辺りをも少し議論して、経済学のかみ方では、あるいはそれだけではどういふところがつかめないのかを示してもらふと有難い。社会生活の基本的なものをどうつかむのか、その場合社会学と経済学とではどう違ふのか。何故違つてはいけぬのか、それとも違わなければいけぬのかといったことを議論してほしいと思ふ。いずれにしても究極的には社会全体をとらえることがわれわれの共通の課題なのだと思ふ。」

園田「自分もそのことを考えていた。社会生活の基本的なものをつかむか、そのキイになるものをどうしてとらえるか、それをつかみえない欠陥はどこに原因があつたのか、もう一度考えてみたいと思ふ。村研の議論が村落生活の基本的なものをつかみえているのか否かを、もう一度議論してもらいたいと思ふ。」

この日は、以上の御意見をうかがうにとどめ、大会における「方法論」のとり扱いについて結論は出ませんでした。なお、この日の研究会に仙台から上京出席された塚本氏から、秋に東北地区で開く大会に多数の会員の方々が出席されるより大いに歓迎したいというお話もうかがいました。